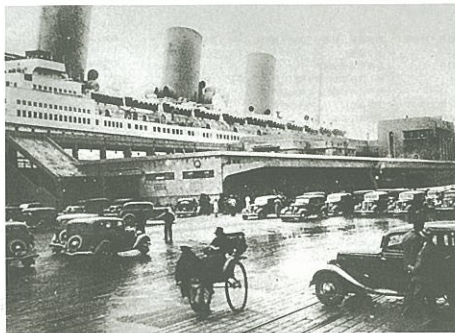


4. 発展・我が国の代表的税関へ



世界一周豪華客船の入港（神戸港第4突堤）

昭和7年から11年まで、年1回世界一周観光船として神戸港を訪れたエンプレス・オブ・ブリテン号（42,384総トン）。同船は戦前神戸港を訪れた最大の客船である。

日清、日露両戦争を経て我が国の経済は急速な発展を遂げ、神戸港においても欧米諸国向け輸出が一段と伸びたほか、軍需品を中心とした輸入が著しく増大した。これらの輸出入貨物を円滑にさばくためには従来の港湾施設では足りず、本船の繫船岸壁、船陸連絡鉄道等近代的な神戸港の築港が急務となった。

このため、明治39年4月大蔵省臨時建築部神戸支部が小野浜に設置されて、同40年9月神戸税関海陸連絡設備工事計画として神戸港第1期修築工事がスタートした。この工事は、大正11年3月までの16年間にわたって進められ、新港第1突堤から第4突堤西半分が完成した。

さらに、大正3年7月に勃発した第一次世界大戦は、欧州向け軍需品輸出を始めとして、中国、東南アジア、アフリカに対する欧州商品の代品の輸出が急増し、貿易は活況を呈した。同4、5年には海運界の好況も加わって、我が国商品はほとんど全世界に進出するといった盛況を示し、産業界はめざましい発展を続け、企業の新設、増設が相次いだ。

このように増大する貿易に対処するため、更に港湾施設の整備が必要となり、同8年に神戸港第2期修築工事が10年間の継続事業としてスタートした。工事は関東大震災及び政府の財政事情から再三繰りのべられ、昭和20年までなかったが、第4突堤東側、第5～6突堤、中突堤、兵庫突堤が完成した。（当時、外資施設整備は大蔵省が、内資施設は内務省が行っていたが、第2期工事は内務省に統一された。）

また、貿易の拡大にともなって税関の組織、機構も整備、拡充が進められた。大正2年6月、第二波止場、川崎波止場、兵庫波止場及び高浜に税関事務所が設置され、輸出入通関事務の現場での迅速な処理が図られた。同13年12月には内務省に属していた港湾事務及び農商務省の管轄下にあった植物検査事務が税関へ移管され、税関は港湾における総合的行政官庁として機能することになった。このほか、この期には地方港での貿易の伸長から、今治、尾道糸崎、宇野、高知、広島各税関支署が誕生した。

他方、大正11年2月19日不慮の失火によって神戸税関本庁舎が焼失し、神戸港第1期修築工事の完工を機会に、新港突堤の要となる第3突堤根元に「帝国の大玄関たる税関として恥しくない近世的大庁舎」（神戸税関沿革略史）を新築することになり、大正12年4月14日着工、昭和2年3月31日竣工した。

この期は、開設以来、成長の一途を歩んできた神戸税関が、戦前における我が国貿易の全盛期を迎えて大きく発展を遂げた時期であった。